

人間に失格なし

東北大学秦皇島言分校 外国語学院英語学科 劉穎慧



初めて『人間失格』を読み終わったとき、すでに深夜でした。
本を閉じてそっと枕元に置いてから、消灯して静かに横たわりました。その夜は寝返りばかり打って寝付けませんでした。

読書はちょっとした趣味なのですが、今回は初めて本を置いたとき重荷を下ろした感覚がなく、いつもと反対に疲れ果てていました。

目を閉じると、狂喜だけでなく恐怖心も手伝って、胸の中に火傷しそうなほど熱い力がこみ上げてくる感じがして、息苦しくなっていたのです。この感覚はそれから二度拝読しても増えるばかりで、今こうしてこの文を打ち込んでいても両手が少し震えています。

太宰先生、代わりに号泣して差し上げたいのです。

太宰先生の綴られた物語は図らずも私の途方に暮れた魂の世界とこれほど符合しています。これまでの読書の中で出会った最大の幸運と言えるほどです。

『人間失格』は日本の「私小説」分野の天才作家、太宰治の代表的作品です。太宰先生の一生は起伏が激しく、先生は何度も自分の生命を終えようとしていました。『人間失格』の主人公、生活に元気がなく、何度も死を求める大庭葉蔵のモデルはまさに彼自身で、彼はこのように少しも容赦なく自分の体に苦痛の烙印を押し、血を滴らせながら人々の前に現れました。そして彼は『人間失格』の脱稿から一か月後、恋人と川に身を投げ愛のために命を絶って、語り尽くさぬ物語をこの世に残したのです。

「弱虫は幸福をさえおそれるものです。綿で怪我をするんです。幸福に傷つけられることもあるんです。」

これは太宰先生が『人間失格』で残した言葉そのものです。不幸なことに、こうした絶望に近く心が痛む筆致は昔も今も世間から軽蔑されています。しかしこのフレーズこそが私の胸の底まで突き刺さるのです。太宰先生は名門の末っ子として生まれ、常人には理解しがたい圧力に耐えていました。おかしなことに、その圧力は他人からではなく、彼の家族、身内からのものでした。まさに書かれているように、昼食を摂る光景でさえ葉蔵には身の毛がよだち、身震いがするものでした。長期の重苦しい生活は幼い葉蔵をおろおろさせ、さながら生き地獄でした。彼が卑しく脆弱なのは、生活がこのように重々しく耐えられないものだったためです。彼は人間を恐れながらも、人間をあきらめることができませんでした。ゆえに彼は滑稽な言行で人類に最後の求愛をするを選び、仮面をつけたピエロになってしまいました。

ピエロなので人々には彼の内心の深い所でぼたぼた滴る涙は見えません。彼の悲哀はまさしく他の人の笑いぐさで、たとえ手足が切断され歯が折れても、誇張した笑顔を絞り出さなければなりません。彼は滑稽さで武装するほかないのです。

ピエロだから。

笑う面の陰に隠された心がとつに支離滅裂だなどと知る人はなく、奇妙な世界に覆われている彼の不安は誰にも理解できませんでした。あまりにも多くの致命傷を受けたため、彼は逃避するようになり、臆病、見かけ倒し、怠惰になって、落ちぶれたのです。彼は自らの人生を残念なこの世の悲劇にしてしまいました。天涯孤独で、困窮して流浪の身となって、ぼんやりと、猛烈な狂喜を回避しつつ悲痛さの来襲からも逃れていました。それで人生は一枚の紙に包まれたようにぼんやりして、本来の姿が見えないので、幸福とも不幸とも言えません。言い換えると、最も恐ろしい平凡だけがあつたのです。

こんなおかしき姿になろうとは誰も思いません。まして葉蔵には夢もあり、是非も弁えています。だから、彼が苦しめられるあまり憎たらしい容貌になったとしたら、罪はこの世界にあるのです。

世間の人は最もひどい生物で、いわゆるすべての暗黒面を許容することはできず、本の内容をさらっと眺めるだけで自分を道徳上の高みに置いてしまいます。もちろん、決して自省するつもりもありません。世間の人は「正義」の旗印を掲げて太宰先生を攻撃し糾弾します。彼は狂っていると言い、いたずらに感傷的だと彼を笑い、彼

の内心の暗さを批判して、彼が薄弱だと感慨を覚えます。それが世の中です。いかなる汚点も罪も容赦できません。まさか私達は象牙の塔しか受け入れられないのでしょうか。まさか私達はみんな大喜びのおとぎ話しか好きになれないのでしょうか。まさか私達の誰もが罪なく、いつでも心に曇りが無いのでしょうか。まさか世界に悲哀が存在してはいけないのでしょうか。まさか私達は自分の良心に尋ねて全くやましさを覚えずにいられるのでしょうか。

誰もが暗黒面を隠し、鮮やかに輝く美しいうわべで完璧な仮相を造り出して、他の人の真実を非難して楽しんでいるだけなのは誰でも分かっています。

世間の人とは、どうしていつもこれほど残酷なのでしょう。

いわゆる世間の人とは、まさに私達ではありませんか？

世の中に最も多いのは、ただまじめくさった顔つきをしているだけの偽善者です。そういう人が最も迎合しやすく最も生存しやすいのです。ゆえに、罪ある者がのうのうとし続け、単純な者は懺悔しています。悪人は聖地を巡礼するふりをして、聖人は地に落ちます。つまり絶対的の大部分は、孤高な世間の人々が本当の人間性を隅に追いやっているのです。

なんと顛倒した世界なのかと思わず感嘆してしまいます。

太宰先生が解らせてくれたのは、困難な世界の中で真相が見つかること、物事の成り行くままに従うことなど最初から無理だということです。

葉蔵の人生は哀れみを誘うもので、何度も自殺して、身内に捨てられ、友人(あるいは不良仲間)に嘲笑されて、最後にはぼろぼろなあばら家で余生を過ごします。しかし彼には本当に少しもいいところがなかったのでしょうか。文章の最後で、バーのマダムが葉蔵を「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んででも、……神様みたいないい子でした」と評価しています。

神だから、自分を救済できなかったのでしょうか。

これこそが『人間失格』の真相です。太宰先生が伝えようとしたのは「罪の多い者は愛もまた深い」ということです。しかし、多くの方は作中で描写された葉蔵の罪しか目に入らず、世間の人に対する先生の愛の深さが分かりません。彼はイバラの中で優しい花をほころばせ、また世間の重い愛の中でしおれました。

平和な年代に生まれた私達は、独りよがりにも他人へ勇者たれと押しつけてはなりません。私達は太宰治ではなく、太宰治になれない運命なのだから、太宰治の人生に平凡な大衆の姿を期待すべきではないのです。いわれなく先生の人生を疑っても空騒ぎに過ぎません。何が高尚で何が浅薄なのか、すべては時間が証明します。一瞬の人も、不朽の人もいます。

先生は胸いっぱい愛で浮世に別れを告げたのだと私は堅く信じています。彼はその一生で愛すべきものはすべて愛し、返すべきものもすっかり返しました。彼は最後の一刻、きっと生命に対して安心したことでしょう。だからこそ世の中にすばらしいはなむけの言葉を残したのです——

「絶望するな。では、失敬。」

これはひとえに太宰先生の洒脱さによるもので、もっともらしく悲しんでみせる必要はなく、口先だけの挽歌も必要ありません。

さあ、それでは笑顔でお別れを。

先生、ずっとお世話になっています。

雲の向こうで圧迫と束縛を抜け出して、自由に幸せでいらっやいますように

参考:『人間失格』